

- 輸入飼料高騰で平成19年からトウモロコシ栽培が拡大。
- 大型水田作法人との耕畜連携**で面積が拡大し、単収も増加した。
- 播種作業の前進化と栽植密度を確保**して、単収が増加しつつある。
- 単収増加で、10a当たり生産費は年々低下中。
- 更なる単収増加で**実収量4トン/10a**、**生産費10円/kg**を目指す。

具体的な成果	普及員の活動
1. 耕畜連携対策 ■大型水田作法人が栽培面積拡大 <b>2戸で5.3ヘクタール</b>	1. 耕畜連携対策 ■大型水田作法人に対して取組事例や収支試算を提示し、栽培面積拡大を誘導
2. 単収増加対策 ■栽植密度の確保 目標6,666粒/10aに対し、 <b>H24栽植密度 5,504粒/10a</b> <b>H25栽植密度 5,938粒/10a</b>	2. 単収増加対策 ■作付前調整会議を開催し、播種作業の前進化を呼びかけ ■調査結果を元に栽植密度のバラツキを提示し、改善策を提案
3. 品質向上対策 ■バンカーサイロでの二次発酵防止 <b>踏圧750kg/m3以上</b>	3. 品質向上対策 ■バンカーサイロで踏圧調査を実施し、均一に踏圧することを提案
4. 収量調査結果の情報提供 ■ロール重量とサイロ容積から換算した実収量の算出 <b>H24収量 2,559kg/10a</b> <b>H25収量 2,803kg/10a</b>	4. 収量調査結果の情報提供 ■ロール重量とサイロ容積から換算した実収量の算出し、目標単収が明確になった
5. 経済効果の確認 ■生産費算出と乳飼比の低減支援 <b>H24生産費 16.0円/kg</b> <b>H25生産費 14.8円/kg</b>	5. 経済効果の確認 ■生産費を算出し、乳飼比の低減に向けて目標単収を提示
	<b>普及員だからできたこと</b>
	1. 耕畜連携支援で、大型水田作法人と酪農家との橋渡し役ができた。
	2. トウモロコシでは、坪刈収量ではなく実収量を算出することにより、明確な目標収量を設定できた。



生育状況巡回と収穫風景